

# パスカル私記

村田 全

私の専門は集合論の歴史であるが、集合論は（現代数学の基礎たる集合の概念を扱うテクニカルな理論であるとともに）極めて卓抜な数学的無限論であり、古来の様々な哲学的無限論とも深いつながりを持っている。そこでここでは、そのようなことを専門とする者がパスカルをどう見ているかについて、ただし随想的に語ってみたい。「随想的に」と断るのは、私自身パスカルを専攻する者でない上、現在、文献の参照が不自由なところにおいて、十分の学問的吟味ができにくいいためである。しかしその半面、こうした機会を逆用して、普段考えていることを好きなようにまとめてみたいという気持ちもないわけではない。その道の専門家から見ると、偏見や誤解、あるいは全く当たりまえのことを力んでいるようなところがあちこちにあるかとは思いますが、一つには問題提起のつもりで、また一つには私見に対する専門家の御批判をまつつもりで、臆面もなく書いてみることにした。

## (1) パスカルとの出会い

私がパスカルの名を初めて知ったのはもう随分昔のことで、かつそのイメージは最初からかなり偏っていたと思う。それというのが、私はド・ラ・メトリの『人間機械論』によって、天才パスカルの名とともに、彼が精神病質だったことを知ったからである。すなわちパスカルは、自分の傍らに深淵が口を開いているという妄想にしばしば悩まされた人で、そのことは「パスカルの深淵」(l'abime de Pascal)として知られている。私がそれを読んだのは、わけも分からずむずかしい書物を読みあさった中学2、3年のことで、もとより何の系統もない読書であり、ただお話として頭に残っただけのことなのだが、何分にも狂天才というようなものにロマンティックな憧れを懐きがちな少年時代のことだけに、その印象は今もなお鮮明である。

ずっと後のことになるが、この印象には、もう一つ別の要素が加わってきた。それは現代数学史の一場面、無限集合なるものをどう考えるかにまつわる挿話で

ある。すなわち集合論の現代数学的側面——集合論による数学の基礎づけ——の開拓者たるデデキントが、集合とはその元（メンバー）を入れた袋のようなものとしたのに対して、新しい無限算術としての集合論の創始者であるカントルは、無限集合を他ならぬ「深淵」になぞらえたという出来事がそれである。勿論「パスカルの深淵」はパスカル自身の無限論と直接につながっているわけでもないし、またカントルの方は、その論文における引用から察しうる限り、「パスカルの深淵」はもとより、その無限論にも特に影響されたとは思えない。（カントルがパスカルの無限論に言及しているのは、その『論文集』（独文）のp.212, p.372ぐらいである。）しかし妄想にせよ、無限集合の象徴にせよ、この二人に等しく「深淵」がからんでいることは、なかなか暗示的なことではあるまいか。実際、カントル自身も精神病質で、結局は精神病院でその生涯を閉じたのだが、このような例を前にすると、無限なるものは深淵に臨むような畏怖の念を人の心に喚び起こし、時としてそれを狂わせるものなのか、という思いがしないでもない。

もともと、私にしても、無限が精神病質の人にのみ掴まえられる幻のようなものだとは思っていないし、そもそもいかに譲っても、カントルやパスカルの純数学的業績に、狂気を思わせるものは見出せない。ただそれにしても、この人達の生涯を見ていると、無限とは、透明にして創造的な精神を駆けて奔命に疲れさせる、それこそ限りなく恐ろしいものと思わざるをえないし、またそれにもかかわらず、それを逐わずにおられない或る型の人間の業の深さには、一種の悲哀の念を禁ずることができない。

ともあれ、以上は私のパスカル観を底流する大きな要素である。

\*

\*

\*

私が曲りなりにも本気でパスカルを読み始めたのは、大学の助手時代からである。特に、中村幸四郎先生がパスカルその他の近世数学史に関して、日本数学会の年会で行われた何回かの講演は、私にとって数学史におけるパスカルへの開眼となった。それ以前にも、私は吉田洋一先生の示唆によって、パスカルの『幾何学的精神』その他を覗いてはいたのだが、それが決して「読んだ」ことになって

いなかったことは、中村先生の講演によってはっきりと自覚できた。またそれと併せて、外国語で書かれたものを本当に「読む」ためには、結局のところ原文に当たってみるべきであること、従ってまた言葉の修練は学問に不可欠なものであることまで、切実に思い知らされたことであった。

パスカル—ヤンセニスト—ポール・ロワイヤル—アルノー—ライブニッツ……というつながりを知ったのも、やはり中村先生のおかげである。勿論、私の乏しい力ではそれらの文献をすべて原文で読むことなど、初めから問題外だけれども、邦訳で納得しかねる場所だけでも原文について吟味しようという姿勢は、その頃から細々ながら続けている。多くの場合、分からぬところはそれでもやはり分からないのだが、それにしても気休め以上のことはあるように思う。

## (2) 文科的パスカル・理科的パスカル

いささか話が脱線した。今度は、哲学者や宗教家としての文科的パスカルと、数学者であり物理学の先駆者でもあった理科的パスカルとの関係について、日ごろ考えていることを二三述べてみよう。そして実を言うと、これがこのたび私に課せられた主題なのである。

パスカルの業績の多様性は、どんなに小さい辞典でも見ることができる。実際、彼について「数学者、物理学者、哲学者、宗教的思想家、文章家」などの項目の中で、二つ以上が欠けている例は稀であろう。現代のわが国での常識からすると、文科と理科という異質な分野でこのような業績を残した人というのは、全く例外的な人物と見られるであろう。しかしそれは果たして本当に「例外的」なのであるか。私は必ずしもそうは思わない。勿論、その各方面で示されたパスカルの天才ぶりは極めて例外的なもので、私といえどもその点に異存はない。しかしその活動の多様性そのものについては、歴史的に見る限り、特に例外とは言えないのではないか。むしろ活動の多様性だけから言うと、それは16、17世紀のヨーロッパに現れるべくして現れた人物像であり、かえってそのような人物の現れえたとともに、16、17世紀ヨーロッパという注目すべき時代の一つの特徴が見られるのではないかと私はそう考えている。

パスカルの活動の多面性を解くのに役立つような——ただし後で示すように必ずしも妥当とは言えない——一つの鍵は、オネットム (honnête homme) という人間像である。辞書によると「オネットム」は「(古義) 君子, 紳士」などとされているが、今日の日本で言えば、専門に偏らない広い関心, 知識をもちながら、それをひけらかすことなく、しかもゆたかな人間性を具えた真の教養人, とでも言えばよいであろうか。紳士 (gentleman) がイギリス人の理想だとすれば、これは当時のフランス人の理想だったもので、パスカルも『パンセ』の中で、

“オネットム。

人から「彼は数学者である」とか「説教家である」とか「雄弁家である」と言われるのでなく、「彼はオネットムである」と言われるようであればならない。この普遍的性質だけが私の気に入る。……”

(『パンセ』 35. 以下すべて前田陽一氏の訳による。)

という言葉に始まる一連の断章 (35~38) を残している。

実は、オネットムという人間像の形成には、16世紀のモンテーニュが貢献しており、その『エッセー (随想録)』は、パスカルの時代には「オネットムたちの座右の書」と呼ばれていたという。(私はこのことを、前田陽一『パスカル』(中公新書)によって知った。私はこれ以外にも多くのことをこの書物によって学んでいる。) パスカルは、聖書を別にすると、モンテーニュとエピクテートス (1世紀のストア派の哲人) を最もよく読んだということだから (『ド・サシ氏との対話』)、パスカルの多面性の一つの源として先ずモンテーニュを考えるのは、一応、説得力のあることと思われるかもしれない。しかしこれは本当は決して妥当な答えではない。それは、パスカルがモンテーニュに親しみ始めたのが28, 9歳のことであるのに、数学や物理学への寄与は既にその十年も前から行われていたからである。

パスカルの数学的天才は極めて例外的で、彼が『円錐曲線論』を書いて19世紀の射影幾何学を先駆したのは16歳のことだし、18歳の時には計算器の発明をしている。また有名な真空実験を行って、「自然は真空を嫌う」というスコラ哲学

の命題を否定し、近代物理学の成立に大きな貢献をしたのも、主として20代の前半のことである。してみると、私が先に挙げた辞典の項目、「数学者、物理学者、哲学者、宗教的思想家、文章家」という順序は、ほぼ彼のした仕事の順序になっているわけである。

さてこうなると、パスカルの業績の多面性の説明は、それが天才なのだと言って、いわば偶然の手に委ねてしまうか——それならパスカルがオネットムの理想に近いのも偶然だということになる——、さもなければ、もう少し別の何かを持ち出してこなければならぬ。そして私はそれを、パスカルのみならずモンテーニュその他を含めて、その時代の思想的雰囲気ないし伝統の中に求めようと思う。もとより、文科、理科の各方面で示されたパスカルの天才の異例ぶりはそれとして、ただ多面性のみを考慮しての話である。要するにルネサンスのいくつかの面や、その背後にあるスコラ哲学の二三の面までを背景に持ち出して、事をそれらとのつながりの中で観察しようというわけである。勿論これは大変な仕事で、学問的立場を守るつもりならば、最初から手の出せるはずのないことだが、初めに断ったように、これは随想的な私記なのだとして、以下、多少の私見を述べてみよう。

パスカルの時代、大学あるいは大学進学課程の学校で学問の主流をなしていたのは、スコラ哲学である。この哲学は、信ぜよと命ずる信仰と、何故にと問う理性の統一、すなわちキリスト教とギリシア哲学との調和・総合を目標とするものである。それは、キリスト教のプラトン哲学の宗教的・神秘主義的側面による理論的武装の形で、調和的に進行した中世の教父哲学（代表はアウグスチヌス、354-430）から始まったが、より現世的、経験的、かつ理性主義的なアリストテレスの自然哲学がイスラーム経由で西欧に伝えられて以後、幾多の変遷を経て、14世紀前後には、神学を頂点とする壮麗な総合的学問体系として一応の完成に達していた。この総合的学問という点を、今考えている問題の手懸りにすることはできないか——。とは言っても、この学問の総合性とパスカルの多様性とを直ちに結びつけるのではなく、両者の間の縁のありそうなところ、なさそうなところを

一通り観察吟味してみてもどうか。これが私の差し当たってのプログラムである。そのためには、スコラ哲学やルネサンスについて、少し触れる必要がある。

14世紀前後のスコラ哲学で最も重要な問題は普遍論争である。普遍(universalia)とは、概念を(アリストテレス流に)種(個体)と類(個体の或る集まり)の関係あるいは概念の外延と内包の関係で上下に並べるとき、最上位に来るものを言う。例えば信者を種とし、類である教区を段階的に並べてカトリック教会に到るつながりにおいて、教会は普遍である。(そもそもカトリックはもと普遍的を意味した。)この普遍が実体的存在である(概念実在論)か、ただの名前である(唯名論)かの論争が普遍論争である。一見、単なる哲学論争のようだが、教会が実体的存在か、ただの名目(「声の風」)かは、最終的には「神」の概念にも波及する態の教会にとって死活問題だったのである。(今日でも、個人—企業—市町村—……国家というつながりにおいて、国家が実体的存在か否かは、政治哲学の大問題であろう。)

この論争をめぐるのは多くの「繁瑣哲学(スコラの別名)」的論争が戦われたが、神を無限者として捉える教会に対し、実体的無限者の存在を認めないアリストテレス哲学を被造的世界のみに適用されるものとし、創造者たる神を唯一絶対的な無限者としてキリスト教神学との調和を図ったのは、教会の実体性を擁護した(概念実在論寄りの)トマス・アクィナス(1225/26-74, アリストテレス派のドミニコ教団)である。他方、同じく神を無限と認めつつ、トマスを批判して、真に実在するのは個々の信者であるとして、唯名論に新しい息吹きを与えたのはドゥンス・スコトゥス(1266/74-1308, プラトン系のフランチスコ教団)であり、その学派は近代的な新プラトン学派として、やがてスコラ哲学の自己解体を招き、ルネサンスにおける二つの思想革命、宗教改革と科学革命に道を開くことになる。

プラトン哲学の数学的側面はこの動きの中で再発見され、科学革命の原動力となって、14世紀頃の後期スコラ派においては、依然として神学中心と称するものの、その枠組みの中では自然の哲学について多くの思索が試みられる。14世紀のオッカム、ビュリダン、ニコラ・オレームなどはその代表的な例である。スコ

ラ哲学は、とかく反 - 科学革命的な哲学と見られるが、そこでも、後の自然科学の思想的骨格は既に着々と準備されていたのである。スコラ哲学の中の「自然科学」を過度に強調するのはもちろん危険だが、現在ではむしろ過小評価の方が世間に通用しており、それが時として科学史におけるルネサンスや 17 世紀の評価を狂わせているのではないかと思われる。

スコラ哲学の話がいささか長くなったが、端的に言うと、私はパスカルにおける「文科」と「理科」共存の一つの遠い源を、まずスコラというこの総合的学問体系の伝統の中に求めようとするものである。勿論、例えば 17 世紀と 14 世紀とでは三百年余り——現在と関孝和の時代ほど——の差があるから、その二つを直ちに結びつけようというようなつもりは少しもない。私の強調したいのは、一個の巨大な思想的伝統は、たとえ或る時代に思想的主流から退くことがあっても、本質的には一朝一夕に消え去るものではないという点である。すなわちその影響は、例えば家庭、学校、あるいは社会的雰囲気を通して、隠微の内に次の時代に残されていくものだという点——現に、スコラは或る意味では今も生きている——を、今考えている問題の場合にも、まず勘定に入れてみようとするわけである。前にも述べた通り、（そして世間一般の誤解とは裏腹に）スコラ哲学は必ずしも反自然科学の体制だったわけではない。そもそも文科、理科の区別自身が、今日のように判然とはしていなかったことも思わねばならない。これが例えば明治初年の日本だったとすると、そこに仮にパスカルのような多方面の天才が現れたとしても、その才能を文科・理科の両面にわたって開花することはできなかつたであろう。江戸時代の日本文化は、それなりに極めて高度のものではあったが、そこにスコラ哲学に見られるような総合的学問の伝統はなかったからである。

しかし以上の議論は時代の一般的傾向を指摘しただけのもので、パスカルという特定の人物については、直接には、むしろ（スコラ的伝統の基盤の上に行われた）非スコラ的教育のことにこそ注目せねばならない。すなわち彼が幼時に受けた特殊な家庭教育と、少年期以後に父とともに参加した「メルセンヌ・アカデミー」の影響がそれである。

パスカルは当時のスコラ的な学校教育を一度も受けておらず、高級官僚（いわゆる法服貴族）であり、数学者、自然学者としても知られていた父親から、合理的、自由思想的な教育を受けている。従ってパスカルの場合、父親のもっていた学識その他の系譜を別にすると、スコラ学の直接的影響は考えなくてよいと思われる。私はパスカルの父にも残っていたはずのスコラ的影響についてはよく知らないが、彼は数学や新しい自然学の研究者として、既にスコラ学の埒外にあったわけだし、また息子に対して、「神学の原理は自然や理性の上にある」と強調していたといわれるのは、前にスコラの解体に関して触れた信仰と理性との分離そのものの現れである。

一方、「メルセンヌ・アカデミー」というのは、1635年にデカルトの友人、メルセンヌ神父が個人的に開いた学者の研究集会で、後の王立科学アカデミーの母体になったもの、伝統的なスコラ哲学に属さない一流の数学者、自然学者などを集めて、近世科学革命の一つの中心になった集会である。パスカルは父とともに早くから（おそらくティーン・エイジの初めごろから）これに参加していた。例の16歳の作品『円錐曲線論』はここで発表されたものであるが、パスカルはこの「アカデミー」において、自然学における実験の重要性を身につけたと言われている。

真空実験や液体静力学など、パスカルの物理学に対する寄与は勿論この「アカデミー」の影響と考えねばならない。彼はトリチェリの水銀柱実験(1643)を聞き、水銀の他、水、葡萄酒などで追実験をするとともに「自然は真空を嫌う」というスコラ的格率の根拠に疑問をもち(1647)、その年から翌年にかけて水柱を用いる一連の壮大な実験を行う。彼は、神学などの真理は記憶と権威によって与えられるとする一方、自然の哲学においては、「実験こそが従うべきまことの師であること」をこの実験によって主張したのである〔『大気の重さについて』、1653頃の執筆、1663刊行〕。これはF. ベーコンの実験重視、デカルトの物心二元論と並んで、近代の物理学ないし自然科学のあるべき相<sup>すがた</sup>を<sup>すがた</sup>実際行動によって示したものである。



もっとも、高さ十メートル余のガラス管やサイフォンを用いるその実験が実際に行われたかは疑わしい。例えば今世紀に行われた再実験では、水に含まれていたガスが真空との界面に沸騰してくるのだが、パスカルはそれに一言もせず「水面は～まで下がる」とのみ書いている。こうした次第でパスカルの報告を疑う人も現れたが（例えば小柳公代氏に詳細な研究がある）、ここはむしろパスカルの論文の説得力を評価する方がよい。事実、或る程度の実験に基づき、組立てられた彼の議論は極めて説得力に富んだもので、マッハの『力学史』や広重徹『物理学史』などでも高く評価されている。

それよりも注目すべきは、パスカルがこうして論じた「真空」の非存在ということで、これは哲学的に見ても神学的に見ても、今日とは比較にならぬ重大な意味をもっていた。実際、アリストテレスの哲学において、自然界は「もの（質料）」によって埋められていて、「虚無」「真空」の存在の余地はない（『自然学』IV, 6～9）。一方、神学においても、空虚な空間なるものは一般に神の遍在性の点から否定されていた。もっとも、神の力たる「虚無からの創造」をめぐるスコラ学者の間で種々の論争があったのではあるが。ともかく真空、すなわち空虚な空間なるものは、物理学の祖と呼ばれるデカルトですら、「理論的」にその存在を否定していたくらいなのである。

ここまでのところで、私の一応の結論はこういうことになる——パスカルにおける文科的要素と理科的要素の共存ということに対してスコラ哲学は大局的かつ潜在的な影響を与えたと思われる。しかしその「理科的要素」の内、数学のことは後でまた述べるとして、自然に関する学問の方は、完全にスコラ的自然学を脱却したものになっており、従ってその文科・理科の「共存」はスコラにおける学の「総合」とは異質のものである。パスカルの理科——物理学——を生んだものは、その天才を別にすれば、直接には家庭教育と「メルセンヌ・アカデミー」であり、ひいてはその背後にあったルネサンスの科学活動である。——どうも、大山鳴動して鼠一匹という態の結論になってしまったようだが、それはそれで構わない。私としては、このあとスコラ哲学とルネサンス思想との関連を少し埋めれ

ば、この話題に入って最初に述べた推測、すなわち 16-17 世紀のヨーロッパには、人間のスケールの大小は別として、パスカルのような人物の現れるだけの理由があったはずだという推測に、私なりの立場で一応の根拠を与えうることになると思うからである。

よく知られているように、ルネサンスは一過性の革命的現象ではない。それは何回かにわたって南欧から北方へと進行していった、芸術、技術、学問、思想、宗教など、文化領域の全般にまたがる、あるいはむしろ時代精神そのものに関する革新の波であって、到底、一筋縄で捉えうる代物しろものではない。現に後期スコラ哲学で、その内外に現れた種々の動きにしても、広い意味ではこの流れの中の一つの波動なのである。

この動き全般については、野田又夫氏がその優れた書物『ルネサンスの思想家たち』（岩波新書）の中で巧みに要約しておられるので、ここではこれを利用して頂こうと思う。野田氏はまず、「オッカム主義におけるスコラ哲学の解体」との関連の下で 14 世紀に始まった五つの動きとして、「第一に反宗教的なアリストテレス的自然主義、第二にキリスト教信仰の純化、第三に神秘主義、第四に人文学者の活動、第五に新自然学の形成」を挙げ、それに 15 世紀に起こったギリシア古典の原典研究という要素を加えて、これを「15、6 世紀のルネサンス思想家たちを位置づけるための基準線」にしようとしておられる。上の話との続きで、その第五の部分引用すると、その新科学の形成は「起源を 14 世紀のオッカム派にもつものであり、オッカム派の人々は、伝統的なアリストテレス自然学とは異なる自然学を構想していた。それは神と宇宙との関係についての新たな考え方と、力と運動とについての新たな見方をふくんでいた」とされていて、先に私が残しておいたスコラ哲学とルネサンス思想との関連は、これで大体埋まるであろう。それにしてもここに「神と宇宙との関係」ということが言われていることは、仮に例の文科と理科の共存という点だけから見るとしても、注目に値することである。

なおルネサンスにおいては、上の五つの要素が互いに関連し合って働くことは少なくなかったが、その一例として触れておきたいのは、16 世紀半ばからイタリ

アで始まったアルキメデス研究である。古代数学の最高峰であるアルキメデスの仕事は、近世では、古代ギリシア数学の諸原典の内ですべてに取り上げられたものであるが、この古典研究という要素は「新科学の形成」の上に決定的な影響をもたらした。実際、この研究はやがてパリ大学のスコラ的自然学と結びつくのであるが、従来、後者の中で思弁的考察の範囲に止まっていたその自然学は、これによって非常な刺激を受けたと言われている（クロンビー『中世から近代への科学史』（コロナ社）や簡潔ながらセルジェスキュ (Sergescu) の著作（邦訳なし）などによる）。これは17世紀における微分積分学および力学——最初の近代物理学の体系——の形成に直結する事件であり、パスカルもその内にこの舞台に登場してくるわけである。

勿論、パスカルに関連する範囲でも、ルネサンスについて注目すべき点はこれだけではない。早い話が、先に引用したモンテーニュは上の第4の座標である人文学者として、16世紀フランスにおけるルネサンスの人間性尊重の面の代表的人物である。ただしこの人には数学や自然学に対する理解、共感は乏しい。また、やがて触れるはずの15世紀のニコラウス・クサヌス（クサのニコラウスの意味）は第三の座標、神秘主義の面に属する人で、しかも彼は「数学」をその神学のために利用している。この人の思想がパスカルに直接に影響したという話は聞かないが、私は、そこに何らかのつながりはなかつたのだろうかという疑問——おそらく独りよがりの素人じみた疑問だとは思いますが——を持っている。更に、私にはほとんど触れることのできない部分であるが、パスカルの宗教活動については、この神秘主義とともに、上の第二の座標、キリスト教信仰の純化という面も逸するわけにはいかない。

こうしてみると、パスカルの多面性は結局のところルネサンスのもつ多面性の反映であり、そして、事は多彩多様だが、その多様性の下に比較的手の届く辺りに、前代を継承した或る種の共通性が底流していたというところに、ルネサンスから近世初頭にかけての時代の一つの特徴があった、と言ってよいであろう。平凡ではあるが、私にはこれが「文科・理科」の問題に対する最も妥当な結論のよ

うに思われる。

### (3) 神 - 無限 - 数学

これまでは、パスカルにおける「文科と理科」の問題を考えるに当たって、専ら「理科」の中の物理学的側面を取り上げただけで、その「文科」はもとより、数学についてもほとんど触れなかった。これは主として、理論と実験の二本の足の上に立つ物理学を「理科」の典型と考えたためであるが、また「数学」が西欧思想史において占める独特の立場について、多少の特別な配慮をしようと思ったためでもある。

今日われわれが「理科」という場合、そこには当然のこととして数学が入っている。そしてそのイメージは、自然科学その他の実際の学問に関連して取り扱われるテクニカルな学問という程度のものであろう。しかし歴史的に見ると、それはしばしば哲学や思想の問題と深いかかわりをもつ極めて基礎的な学問であり、むしろ物理学を典型とするテクニカルな（と思われる）「理科」系の学問と、より哲学や思想の問題に近い（と思われる）「文科」系の学問との中間にあって、両者の橋渡しをする性格の学問と言ってよいのである。われわれは以下で、パスカルにおける「無限」の問題を中心にこのことを一瞥してみようと思うが、ともかくヨーロッパ「数学」のもつこの性格は、ヨーロッパ的学問一般の特徴を論ずるに当たって無視しがたい意味をもつものであって、これは、たまたま数学に縁のある私が、我が田に水を引いているというような性質のことではない。それよりも、歴史的な考察をしようという場合には、「数学」のもつこのような側面を、20世紀的な先入観によって単純軽率に割り切りすぎることをこそ警戒せねばならない。（なお、西欧数学のもつこの特性について、下村寅太郎『科学史の哲学』（著作集第1巻）、クライン（中山茂訳）『数学文化史』（河出書房）などを参照されたい。）

まず多少脇道のようなのだが、数学に関するギリシア以来の根本的な哲学的問題として、数学の対象の存在性ということを取り上げる。例えばユークリッド幾何学において、「点」は「部分のないもの」と定義されているが、そのように実際に

は見えもせず描けもしない抽象的な「図形」は、いかなるところに、またいかにして存在しうるか、これがその問題である。

改めて言うまでもなく、これはプラトン哲学が後世に残した重大な契機的問題である。しかもそのように非現実的、非経験的な対象の上に構築された数学が、かえって万人を承服させる不動の真理性を獲得していたのは事実であって、むしろその事実自身が、真理は経験的現実を越えたところにあるということの生きた実例として、プラトン哲学の大きな支えになっていた。学の学としての哲学において「数学」がこれほど重大な意味をもった例は、ギリシアにおけるこの事実以外に、どの古代文化にも類例を見ないことのように思われる。そしてそれは逆に、その伝統下にある哲学一般の性格を規定する要素でもあるのである。

ここで更に付け加えるが、この数学とそれを支えた哲学とは、古代ギリシア以来、連綿として今日まで継承されてきたわけではない。前にスコラ哲学について述べた時に気付かれた読者も多いであろうが、一口にギリシア以来の西欧的学問の伝統と言っても、より詳細に見れば、一旦はギリシア文化と断絶したキリスト教的ヨーロッパが、最初はアラビア人からその高い学問文化を学び、そこにアラビア的理解の下での古代ギリシア的学問があることを知り、次いで自らも直接の史料原典によってそれに接しうらようになった上で、改めてそれを彼らなりに解釈して捉えていったというのが、その「伝統」の実態である。従って学問的立場からすれば、その歴史の一駒一駒——例えば誰その捉えたプラトンとは何かというようなこと——が、既に大変な労力を要する専門的問題であって、その多くは今なお十分明らかになっているとは言えない。ただ、いずれにしてもその伝統は、幾多の紆余曲折の後、ルネサンス前後の新しい思想的雰囲気の下で、近世以降のヨーロッパに定着して今日に到っている。しかもそれは、ようやく近年になってその伝統に接したわが国にとって、学んでもって独自の展開を期しうべきものでありながら、その真相のまだ十分に捉えられていないものなのではないかという気がする。

脇道がいささか長くなったが、「無限」という問題もまた、哲学や宗教の問題で

あるとともに「数学」的な側面をも具え、しかもその三者の間には、しばしば深いつながりの認められる大きな問題である。実際、数学的「無限」であれ、哲学や宗教における「無限」であれ、こと無限については、その存在性——それはどこに、またいかにして存在しうるか——が、まず問題である。というよりも、それは無限論において最も本質的な問題の一つである。それというのが、そもそも無限なるものは、本来、人間の経験や認識を超えたもののはずだからである。これは一種の普遍論争に他ならない。

われわれは以下でこの問題をめぐって、パスカルの無限論と、前に触れたニコラウス・クサヌスの無限論とを並べて検討してみたいと思う。もっとも、私は、パスカルがニコラウスから何らかの影響を受けたと主張しようというのではない。そのようなことを述べている文献を私は知らないし、事実上、そういうことはないのかもしれない。また、たとえそのような事実があったとしても、それはパスカルの入信(1654)以前のことではあるまいから、彼の数学的業績がその影響を受けたということは、まずありえないであろう。従ってその比較は表面的なものになるかもしれないが、とにかくそれは、パスカルの無限論の或る側面を明らかにする役には立つのではないかと思う。私としては、その二つの間に何らかのつながりがあったのではないかという推測さえ持っているが、それについては、話がそこまで行ったときに述べることにする。

学問としての無限論は、その歴史をアリストテレスに発すると言ってよい。その主旨は、実体としての無限大の不存在と、物質の窮極要素としての原子の不存在（言いかえれば物質の無限分割可能性——過程的無限の存在——）との主張というふうに要約されるが、その議論の進め方は概念の詳細な分析に基づいて理路整然と、少なくとも、そうあるべく努めつつ行われている。ここではこの態度を、無限論に対する理性主義的アプローチと呼んでおく。

ところが無限論の歴史には、これに対立する、もう一つの立場がある。それは神を超越的無限者として捉えるキリスト教の伝統である。この伝統はその一つの源を、ヘブライの神エホバ——ひたすら信仰され服従されることを要求するの

みで、探求され理解されることを許さなかった、あの最も超越的な神——の中に発する。無限に対するこのアプローチは、およそ理性主義的アプローチの対極であって、これを捉えるには、或る種の反理性主義的 - 超越的な直観というふうなものによる他ない。無限に対するこの姿勢を、ここでは神秘主義的アプローチと呼んでおく。大まかに言って、プラトン哲学の宗教的側面はこれである。またスコラ哲学の狙った、哲学と宗教の調和という問題は、この点から見ると、この二つのアプローチをいかに止揚するかということに他ならない。要するに、アリストテレスが存在せずとした実在的無限の在り所を、キリスト教神学は「神」のための特別席として、どのように留保するか、それが一つの大問題だったわけである。

ニコラウス・クサヌス (1401-1464) はドイツの出身で、ローマ教会の枢機卿だった人である。その「数学」は今日から見て決して高くはないが、彼は「数学」を絶対的で正確なものと考え、「数学」によって、人間の可能性と限界をこもごも悟ったと言われている。手っ取り早く言えば、一方に例の大きさのない「点」などのことを考え、他方これに対比して、人間が現実に行う作図や測定「不完全性」のようなことをでも考えたのであろう。そしてこの種の認識が、彼においては或る意味で神への道に通ずるのである。「数学に通じていない人に、神性についての知識は手が届かない」というボエティウス (5世紀の哲人) の言葉を、彼はその主著『知ある無知』 (*De docta ignorantia*) の中に引用している。

ニコラウスは、神という絶対的無限者に到達すべき道として神秘主義的アプローチをとる。彼によれば——私に理解できる範囲では——、神はあらゆる差別、対立を超えたもの、いわゆる「反対の一致」であって、これを捉えるには、有限的理性の分別を否定した、いわゆる「知ある無知」によらねばならぬ、と言う。そして彼はこのことを「数学」によって示唆ないし象徴しようとするのである。例えば、

「円が円以外で測れぬように、真理は真理以外のものでは測れないが、有限的知性は真理ではないから、真理の厳密な把握はできない。知性は、円に対する多角形のようなもので、角の数が増すにつれて円に似てはくるが、本質

的には円にはなりえない。すなわち存在者の本性——真理——は、純粹の形では到達できぬもので、この知ある無知に徹すれば徹するほど、真理に近づく」（『知ある無知』からの要約）

という意味のことを言う。また、神は無限者であるが、単に有限あるいは無限小に対立する相対的な無限大なのではなく、無限大にして無限小なるもの、永遠にして個々の今に在り、世界の中心にいますもの、原理たる「一」あるいは「点」にして同時にその展開たる「多（すなわち数）」あるいは「図形」であるもの、そのような「反対の一致」であるとも言う。（ついでながら、アリストテレスにおいては「無限大」と「無限小」は別扱いで、両者の相関関係には言及されていない。これが意識されるのは、聖トマス頃からである。）『知ある無知』においては、神学的、哲学的な主張をこの種の「数学」的実例によって象徴している場合が、他にも数多く見出される。有名な、半径が無限大の「円」は「直線」と一致し——無限における反対概念の一致——、その中心はどこにあっても全世界をおおう——世界中心たる神の遍在性——などはその一例であるが、いずれにしてもこのように、今日のわれわれが（日本的な意味で）神秘主義という言葉から想像しがちなことと違って、彼は「数学」に絶大な信頼を寄せており、これを神に到る道——知ある無知——への導きにしているわけである。

実はこのような例はニコラウスに限るものではない。一般に西欧の神秘主義ないし反理性主義は、神あるいは絶対者に到る道として理性的なものを取らず、超越的ないし神秘的な直観というような類いのものを持ち出す立場であるが、こと数学に関する限り、その当面の対立者である理性主義ともども、数学的真理の絶対性を信じている例が極めて多い。宗教家としてのパスカルもまたその顕著な例であるが、神秘主義がしばしばこのような形をとるところにもまた、西欧思想の一つの特色が認められるであろう。

さて私がパスカルをニコラウスに対置しようとするのは、何よりもまず、この二人が、神 - 無限 - 数学という関連をめぐって、いくつかの類似点をもっているからである。「二つの無限」に関する有名な断章（『パンセ』72）は無限大と無限



小の中間にある人間の運命を語って、その宗教的感情の深淺を別にすれば、ニコラウスの無限大と無限小の総合や、「否定」を通じて神に到る道を思い起こさせる。その他、神における「反対の一致」や神の遍在性に対する数学的象徴もあれば、「知ある無知」に対応するものもある。次に『パンセ』の中からその二三を引用しよう。

「神が無限であり、しかも部分を持たないということは不可能だと思ふのか。——そうだ。——それなら、無限であり、しかも不可分のものを一つ君に見せてあげよう。それは、無限の速度であらゆるところを運動している一つの点である。なぜならそれは、あらゆる場所において一つであり、おのおの場所において全体であるからである。……」(231。なお 232, 233 なども参照。)

「矛盾。われわれのすべての相反するものを一致させないかぎり、りっぱな人間像をつくることはできない。……」(684)

このような例は『パンセ』のあちこちにある。しかもニコラウスが、感覚や理性の及ばぬところで「知ある無知」という神秘主義的アプローチをとるのに対応して、パスカルの方でも、その神——いわゆる「隠れた神」——に到るためには、「幾何学的精神」(esprit géométrique, 1657頃)という理性主義的アプローチでなく、神の恩寵の賜物である「繊細の精神」(esprit de finesse)という神秘主義的アプローチがとられている。(ついでながら、「幾何学」という言葉は、当時は「数学一般」の意味にも使われていたので、「幾何学的精神」も実は「数学的精神」と読む方がよい。フランスでは「幾何学者 (géomètre)」という言葉で、必ずしも「幾何」の学者を表すのでなく、むしろ「大数学者」の意味を含ませることが少なくない。この用例はポアンカレをはじめ、現代のブルバキの『数学史』などにまで残っている。)

このような類似は果たして偶然の一致であろうか、あるいは当時の神秘主義が一般にもっていた通性なのであるか、それともそのいずれでもなくて、それがおよそ絶対的無限者に接近すべき真の道というものなのであるか。このことに

ついてあえて私の思惑を言うならば、私は信仰をもたぬ異邦人の一人として、この第二の可能性——当時の通性だった可能性——が最も高いのではないかと思う。そしてこれこそ私にニコラウスとパスカルのつながりを推測させる誘因になったことなのだが、それを示すため、次にパスカルの属した宗派のことに触れておく。

よく知られているように、パスカルが参加したのは、パリ郊外のポール・ロワイヤル・デ・シャンに集まっていたヤンセン派の宗教運動であるが、この宗派は当時のフランスでは反主流派であった。これに対する主流派は、アリストテレス主義の聖トマスの流れを汲む（そして例えばいわゆる決疑論に見られる）教条主義的なジェズイット派であって、「(プラトン主義的な)アウグスチヌスに帰れ」と主張して教会の現状に抗議するヤンセン派のポール・ロワイヤル運動は、ジェズイット派と激しく争うことになる（例えばパスカルの『プロヴァンシアル』）。しかしそれは結局、18世紀の初めには官憲の手で禁止され、広大な敷地にあった多くの建物も破壊されてしまうのである。

こうした事情なので、この宗教運動については、宗教以外のところで後代に影響の大きかった『ポール・ロワイヤルの論理学』、『ポール・ロワイヤルの文法書』その他の刊行物を別にすると、今なおよく分からないことが多いと言われる。私が、ポール・ロワイヤルの運動、あるいはその源であるオランダの神学者ヤンセニウス(1585-1638)に対して、ニコラウス・クサヌスが何らかの影響を与え、パスカルもまた直接にか間接にか、その影響下にあったという事情はなかっただろうか、というのは、以上のような事情を考慮したのである。なお、ニコラウスの影響は、ブルーノやガリレイをはじめ多くのルネサンス人の間に認められている。

この私の推測は推測以外の何者でもないが、この問題に限らず、一般に宗教上の争いのからんだこの種のことについては、具体的な史料に即して然るべき準備を経た上であれば——もっとも、この然るべき準備なるものがわれわれにはまことにきびしい条件である——、宗教問題に白紙の状態にある日本の学者なども、かえってヨーロッパ人の眼に見えないヨーロッパ世界のことを、明らかにできる場合があるのではないかと思われる。

私は今まで、ニコラウスとパスカルとの類似点ばかりを強調してきたようだが、勿論その間にはいくつかの重大な違いもある。おそらく、前者の「知ある無知」の弁証法と、後者の「神の愛」——上記の恩寵——による弁証法とでは、宗教的に見て極めて大きな隔たりがあることであろう。しかし私に言えるのは、それぞれの弁証法における「数学」ないし数学的無限の役割にかなり顕著な類似性が見られるにもかかわらず、二人の「数学」そのものの間に大きな差異が見られるということである。

実際、ニコラウスの純数学的業績は、円周率の計算その他、今から見ればむしろ他愛ないほどのものであるが、それに対してパスカルが数学史の上に残した仕事は、いつ見ても、ため息の出るほど巨大である。そしてこればかりは、たとえ二人の間の二世紀に余る年月のことを勘定に入れてみても、結局のところパスカルの天才という歴史的偶然のなせる業とする他ないであろう。次に彼の数学的業績について大づかみに述べよう。

パスカルの天才の見本のようにになっている 16 歳の作品『円錐曲線論』と、18 歳の計算器の発明とについては、前にも少し触れた。以下では問題を無限その他、多少にもせよ彼の哲学に関連するものに限定する。もっとも、そうは言っても、今挙げた二つ以外の彼の全数学が、結局はそれに関連することになるであろう。

まず数学的無限について言うと、彼は「自然数全体」という無限者の処理を可能にしてくれる、いわゆる数学的帰納法（完全帰納法）の原理を、歴史上最初に把握した人である。この原理は「或る性質  $P$  がいかなる自然数  $n$  についてもなりたつことを示すのに、(i)  $P$  が 1 に対してなりたつこと、(ii)  $P$  が  $k$  についてなりたてば、 $k$  の次の数  $(k+1)$  についてもなりたつこと、の二項目を示せばよい」という、言われてみれば至極単純なことだが、このわずか二つの項目によって、自然数全体という無限の対象が完全に処理できるところに、その重大な意義がある（『数三角形論』ほか、人文書院版『パスカル全集』第 1 巻、原亨吉訳、参照）。19 世紀にデデキント - ペアノが構成した「自然数論」は、この原理を自然数なるものの定義に用いるという開き直った一歩——勿論、重大な一歩——を進めたもの、

という言い方さえできるのである。(パスカルが数学的帰納法を初めて自覚した、ということについては、オランダのフロイデンタール(1953)とともに、中村幸四郎(1952)、原亨吉(1962)の両氏に優れた論文がある。)

しかし数学的無限に関連してこの問題以上に大きいのは、微分積分学の黎明期にパスカルが行った一連の研究である。特に彼の積分概念(サイクロイドの求積(1658)、その他)は、立論の厳正さにおいて、デカルト、フェルマ、ニュートン、ライプニッツ等、その前後の時代の<sup>そうそう</sup>錚々たる数学者の業績をしのぐもので、19世紀のリーマン積分に近い精密さをさえ具えていた(ただし欠点もある——後述)。ライプニッツなども若い頃、その数学上の師であるホイヘンスの勧めでパスカルの論文を読み、そこから大きい影響を受けたのである。(細かく言うと、当時のこの方面の<sup>テクニク</sup>数学的技法を単純に無限算法と呼んでよいか否かに、問題の余地がないわけではない。しかしここでは、それらの技法の背後にある、無限に関する深い省察に重点をおいて考えているのである。)

以上とは別に、フェルマとの往復書簡の中で数学的確率の考えを組立て、二人で確率論の創始者という栄誉を分かち持っていることも言っておかねばならない。「偶然」の問題は元来は「数学」の問題というより、むしろ哲学あるいは神学の問題だったものであり、「偶然」の数学化においても、そのような要素は働いていたものと思われる。逆に確率論を、「神」にからむ問題の考察に持ち込んだ例もある(『パンセ』、下で引用の「賭」の断章233など)。なお、最初に挙げた数学的帰納法の原理が自覚されるのは、フェルマとの往復書簡の中で確率の問題を論じていた過程でのことである。

ただし微分積分学の領域をはじめ、これらの理論のおのおのにおいてパスカルが用いている論法は、理論的に厳正、明晰ではあるが取り扱いには骨の折れるギリシア幾何学流の論法であって、当時ようやく支配的になりつつあった記号代数的方法(デカルト、ライプニッツをはじめ、ニュートンですら採用している)には、パスカルはほとんど近づいていない。もっとも、当時の記号代数的方法は理論的には八方破れと言ってよい状態(例えば  $\Delta y$  を、 $\Delta x \neq 0$ )で割った後、あえ

て  $\Delta x = 0$  とおく！　これはやがて極限算法  $\lim$  によって‘救済’される) にあり、この時代に厳正な理論を構築しようとするれば、勢い幾何学の流儀によらざるをえなかったという事情はある。(数学解析の「解析」とは、当時は代数的方法の意味であり、論証法というよりは発見的手法という傾向のものであって、まだ幾何学ほどの理論的学問体系にはなっていなかった。代数学が学問的方法として自立し、更にその中から微分積分学を含む一大部門が「解析学」として独立するのは、デカルトに始まり、ニュートン、ライプニッツを経て、なお一世紀あるいはそれ以上の年月を経てからのことである。) しかしともかくその八方破れ的方法は、取り扱いの簡便有効な点を買われて、やがて微分積分学の本流になっていく。この意味から言えば、パスカルの数学は、その厳正な美しさは美しさなりに後向きであり、むしろ「美しき行き止まり」というような感じさえする。

ここで目下の話題の締めくくりとして、パスカルにおける数学的無限と神の無限性との関係についてまとめておきたい。端的に言うと、パスカルは数(あるいは空間)の無限性と神の無限性とを明確に区別していたと見られる。例えば上で言及した断章 233 がある [引用の前の番号は原文での出現順]。

(2) 「われわれは無限が存在することを知っているが、その性質を知らない。たとえば、われわれは数が有限であるというのは誤りであることを知っている。したがって数には無限がある (Il y a un infini en nombre)。しかしわれわれは、その無限が何であるかを知らない。……

[上の原文は細かく言うと「無限がある、数の範囲に」ではなく、「数の形の或る無限がある」と読みたい。最後の……は下の引用 (3) である。]

(4) 「このようにして、人は、神が何であるかを知らないでも、神があるということは知ることができる。……」

(5) 「さて、われわれは有限なものの存在と性質とを知っている。なぜなら、われわれもそれと同じに有限で広がりを持っているからである。」

(6) 「われわれは無限の存在を知っているが、その性質は知らない。なぜなら、それはわれわれと同じに広がりを持っているが、われわれのように限界を持

たないからである。」

(7)「しかしわれわれは、神の存在も性質も知らない。なぜなら、神には広がりも限界もないからである。……」(『パンセ』233)

この先が「賭」の問題で、彼は神を無限に、人間精神を有限一無に対置し、人間はこの無知の故に神の存在に賭ける他なしと論じている。冒頭の(2)の前後には次の(1)、(3)があって、遥かにカントルの集合論を思わせる。

(1)「1を無限の上に足しても、少しも無数を増加させない。1ピエを無限の長さに足しても同様である。有限は無限の前では消えうせ、純粋な無となる。……」

(3)「それ[無限]が偶数であるのは誤りで、奇数であるのも誤りである。なぜなら、それに1を足しても、その性質に変わりはないからである。……」

神の無限と数学的無限のこの区別については、例えば次のような解釈もできるであろう。——パスカルはニコラウスなどと違って、神の無限性に対しては、あくまで神秘主義的アプローチを守る一方、数学的無限に対しては極めて理性主義的というか、明晰透明な態度を持している。言いかえれば、「無限」という、本来、合理的に割り切れぬものの中から、にもかかわらずそこに在るところの、合理的に割り切れる或る側面を固定したもの、それが彼の数学的無限だというのが、私の解釈である。そしてその意味では、彼は19世紀末のカントルを先駆した人の一人と見てよいであろう。というのは、カントルもまた、数学的理論である集合論の背後に多くの哲学的考察を潜め、それを神学的論議にまで発展させた人だからである。すなわち彼はアリストテレスの無限論を批判し、ニコラウス・クサヌスをはじめ、スピノーザ、ライプニッツ、ボルツァーノなどの無限論を徹底させる形で、その集合論の哲学を展開したのである。なお断章233の内で上に引用した(1)～(3)の部分は、カントルがパスカルについて引用している唯一の場所である。

カントルのことはともかくとして、パスカルが上の二つの領域で行ったそれぞれの無限論の根底には、深い哲学的思索と、おそらくは深刻な宗教的体験とが共

通に横たわっていたに違いない。そのような思索と体験の中から、哲学的色彩も宗教臭も脱却した或る客観的要素を「数学的無限」として的確に抽出、表現したのは、まさに彼の数学的才能に他ならない。そして考えてみると、彼の場合これと同様のことは「確率」の概念の抽出、表現の場合にも当てはまるのである。

偶然 - 必然の問題も、有限 - 無限その他の問題と結局は一つの根につながることで、パスカルの思索と体験のなお深い淵の底に隠れているものは、常に、超越的な「神」である。ただ彼の類い稀な数学的能力がその深淵を探って、そこに潜むいくつかの渾沌たるものに明確な眼鼻をつけてくれた。荘子の場合だと渾沌はそこで死ぬわけだが（「日に七竅 [眼鼻などの七つの穴] をうがち、七日にして渾沌死す」（『莊子』））、パスカルにおいては、それが数学的帰納法の原理となり、確率の概念となって「数学」の世界に新しい要素をもたらしたのである——このような言い方は見当違いであろうか。ともかく、私の言いたいことを示唆してくれそうな断章を次に引用しておく。これは私の最も好きなものの一つである。

「私は自分が存在しなかったかもしれないと感じる。なぜなら、自我は私が思考するところに存在するからである。だから、私が生まれ出る前に、私の母が殺されていたら、この思考する自我は存在しなかったであろう。そうだとすれば、私は必然的な存在ではない。同様に、私は永遠でも無限でもない。しかし、自然のうちには、必然的で永遠で無限な存在があることを、私はよく知っている。」（『パンセ』 469）

パスカルの数学的無限や確率も勿論この「私」と一蓮托生である。

このようにしてみると、この「無限」や「偶然」の数学化、ないし、そこにある数学的要素の表出は、またパスカルが明晰な文章家であったことと無縁でないように思われる。というのは、「数学」には本質的に、合理主義的記述のための文法、それも新しい概念構成の可能性を内に潜めた創造力のある文法という面があるからである。このことまで含めると、文章家パスカルもまた数学者パスカルと同根のものだと言いたくなるが、そこまで言うと、数学者あるいは数学史家のこの悪文に悩まされた人びとに、悪のりもい加減にせよと言われるかもしれない。

ここで事のついでに書いておくと、パスカルの姉の記録として、12歳のパスカルがユークリッドの『原論』の初めのいくつかの部分<sup>を</sup>、全く独力で再構成したというエピソードがある。私はこれを一概に否定しようとも思わないが、過度の信用をおくのも考えものだと思っている。それというのが、『原論』は、ギリシア以前の先進文化の長い蓄積に加えて、多くの暗中模索や彫琢<sup>ちようたく</sup>の末に成ったもので、しかもその定義や公理の構成には、現に在るもの以外にも種々の可能性があったと見られるからである。現にパスカル自身も、「二つの無限」に関する有名な断章（『パンセ』72）の中で、このことに触れている。

「……すなわちわれわれは、すべての学問が、その探究の範囲において無限であることを認める。なぜなら、たとえば幾何学が展開すべき命題は、無限に無限であることをだれが疑うであろう。同様に、これらの学問は、その原理が多数で微細である点においても無限である。なぜなら最後のものとして提出された原理といえども、それ自身では立つことができず、他の原理によって支えられ、その原理もまたさらに他の原理を支えとしているのであるから、最後のものなど決してありえないということを、認めないものがあるか。……」

要するに『原論』の体系自身、決して唯一不動のものではないわけで、パスカルがいかにか天才であっても、『原論』そっくりの再構成などはまず望めることではない。これは、彼が『原論』に出てくるいくつかの定理と同じもの（特に命題32の三角形の内角の和は、伝記の中で明記されている）を再発見し、何らかの形で「証明」したと解するのが妥当であろう。彼の異常な天才ぶりを伝えるにはそれで十分だし、そのようなことならば、世の中にはそうしたこともあるものかと、素直に感嘆できる話である。ただし、これはこの逸話に水を差すためでなく、『原論』成立史の重さを伝えるために付け加えたことである。

#### (4) ポール・ロワイヤル・デ・シャンへ行く

思い出話で始めた「私記」が、いささか理屈っぽくなりすぎたので、最後に、もう一度、別の思い出を書いて話を締めくくろう。



1972年4月、初めてパリの土を踏んだ私は、到着した翌日の午後、早速ルクサンブールに近いポール・ロワイヤルのパリ分院跡を訪れた。実をいうと、それほどまでパスカルに関心があったわけでもなかったのだが、地下鉄の駅「ポール・ロワイヤル」の名に惹かれてそこで下りてみたのである。しかし現実のその分院跡は、自動車の行きかう広い道路に沿った産院になっていて、恐る恐る覗いた中庭には、人影もない代わりに遺跡めいたたたずまいもなく、ただ春の日がクリーム色の建物の壁に淡い光を投げかけているばかりであった。勿論、それ以上踏み込んで誰かにもものをたずねるほどの言葉の力もなく、しばらくぼんやりしてただけで引き揚げたが、ずっと後になって、宗教社会学の学者である同宿同年の友人オリヴィエ神父——名をブレーズという！——にその話をしたら、ポール・ロワイヤルのことなど、その辺で誰に聞いても逆に問い返されるのが落ちだと言っていた。そして逆に、日本人は意外なことを知っているものだななどと賞められて、少しばかりいい気分になったことだったが、ともかく私の二度目のポール・ロワイヤル・デ・シャン訪問は、その時の雑談がきっかけになって実現したことである。

パリにいた二年余りの間に、私は友人たちの好意によって、ポール・ロワイヤル・デ・シャンの旧跡を二度もたずねることができた。「二度も」というのは、その場所が、パリ郊外とはいうものの、バスも汽車も通わぬ不便な所で、自動車運転のできない私には、大金を投じて車をやどうか、友人の車に乗せてもらうか以外に、どうしようもなかったのである。

残念なことに日記を怠けていたため正確な日付けは分からないが、一度目は1972年の晩秋のことで、この時は或る若い日本人の哲学者夫妻に連れていってもらった。もっとも、道案内をしたのは、地図と旅行案内書を持ち、自ら土地勘のよいと称する私であった。ところがその途中、思いがけなく、これもポール・ロワイヤルに縁の深いラシーヌの遺跡のある村があり、その辺で少々道草をくいすぎた上、少々道が怪しくなった。その内に、緯度の高いフランスの秋の日は見る見る内に傾いてきて、目的地についた時には、既に暮れ方の気配があたりに潜びよっていた。それでもその日の最後の参観グループ十人ばかりの仲間にはなんとか加

わることができ、遺品陳列所になっている旧礼拝堂を慌しく見て廻った。もっとも、その一グループだけで一杯になるほどの小さな建物で展示物の数も多くはなく、在りし日のポール・ロワイヤル・デ・シャンの偉容を伝える鳥瞰図<sup>ちようかんず</sup>や、アルノー、パスカル、ニコール、ラシーヌ、あるいはパスカルやアルノーの一族などの絵姿が印象に残っている程度である。むしろ荒廃した旧礼拝堂自身や、その入口の前に雨ざらし日ざらしで並んでいるパスカルとラシーヌの像、更には駐車場の場所からそこに到る道すじの古い石垣や細いせせらぎの鄙<sup>ひな</sup>びただだずまいの方が、今でも脛に残っている。上田敏の訳によるボードレールの「薄暮<sup>くれがた</sup>の曲<sup>きよく</sup>」の、「匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうたたり、ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦<sup>う</sup>みたる眩暈<sup>くるめき</sup>よ」という一節、それは本当は春愁の歌なのだろうが、それが不意に三、四十年ぶりに、ふと口の端<sup>は</sup>に上ったのも忘れられない。

二度目の訪問は翌年の初秋のことで、ブレーズと私の共通の若い友人マルク・アラン君の案内であった。このたびは事情に詳しい人に連れられてのドライブだったから万事順調にいて、まず前の年には廻れなかった本格的な博物館を訪問した。穏やかな秋日和の午後だったのに、参観者はアラン君、私、私の娘、それにもう一家族だけという閑散さで、一同はすぐばらばらになった。パスカルの肉筆原稿の前で、さすがに立ちつくしていたら、無柳<sup>ぶりよう</sup>をかこっていたらしい番人が、あなたは歴史家か哲学者かなどと言いつつ近寄ってきて、写真をとるための光線の具合などを助言してくれた。見開き2頁の草稿を見たからとて、どうということもないと言ってしまうとそれまでだが、私のような仕事をしていると、こうした経験が、どこか深いところで自分の学問の推進力になってくれることも、よくあるのである。

そこを出てから、前に見た例の小礼拝堂へ再び廻ったのだが、その間の何分かに及ぶドライブ道路はすべてポール・ロワイヤルの敷地の一辺で、おりおり木々の切れ目から見えるその敷地は、穏やかな起伏をなして目路の限りに拮<sup>たが</sup>るといふ感じであった。この一派の宗教的勢力もさることながら、それを支えていったアルノー、パスカル、その他の人びとの経済的基盤というようなこともまた、私

に多くのことを思わせた。この種のことや、ヤンセン派とジェズイット派あるいはルイ王朝との激しい抗争、ひいては西欧の歴史の中でキリスト教の占めてきた絶大な力やその争いの種々相など、私は今更のように、ヨーロッパ世界について自分の知っていることの小ささに嘆息せざるをえなかった。

考えてみると、私は従来、17世紀の学者の中でパスカルよりは、まだしもデカルトの方を読んでいたのであるが、パスカルの遺跡を探ねたわりに、不思議にデカルトの旧跡は探ねなかった。これは一つには偶然のなりゆきであったが、また一つには、前々からデカルトに比べてパスカルの分かりにくさが気になっていたせいもあるかもしれない。(パスカルの生地クレルモン・フェランはついに訪ねる機会を持たなかったが、真空実験で名高いパリのサン・ジャック塔は、散歩の途中で何回かベンチに休んで見上げたことがある。) もっとも、それらの場所を歩いてみて、現実の人としてのパスカルのイメージが何となく定まったような気がする半面、その内面的な分かりにくさは、かえって一段とその深みを増した感がある。

ひとりこのことのみではない。私のパリ滞在は、結局、掴み切れなかったものの渾沌こんどんとした大きさを実感させてくれただけだったような気がする。この「私記」にしても、いつか本物の書ける見透しもないままに、むしろ開き直って書いてみたのだが、書き上げてみると、いささか恥知らずだったかなという悔いもないわけではない。パスカルに関心のあるアマチュアの放言として、寛大に御叱正を頂くことができれば幸いである。

(原型『現代思想』第5巻第10号、青土社、1977)

---

## PDF 化にあたって

本 PDF は、

村田 全『数学と哲学との間』（1998 年 2 月，玉川大学出版部）

を元に作成したものである。

科学の古典文献を電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

に収録してあります。

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内，その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか，書き込みください。